

ガチレズ拗らせ破戒  
ガールズ

難民180301

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

愛されたい。チヤホヤされたい。そう願う大賢者ちゃん（13・♀）と、振り回され  
る少女たちのお話。

ガチレズ拗らせ破戒ガールズ

|

1

# 目次



# ガチレズ拗らせ破戒ガールズ

「ゆつ、ユースさん!? 何をされるのですか!?」

私が首に手を回して正面から抱きつくと、アンジエは面白いように慌てふためく。露出の少ない僧衣から覗く白磁のような肌が真っ赤に染まり、手をわたわたとさせてい る。

それに構わず豊満な体を抱きしめ続けていると、

「きゅう……」

アンジエは目を回して卒倒した。

「ヒューヒュー！」

「昼間つから大胆だなユ一姉！」

「うるさいぞガキ共。これは高尚な実験だ」

アンジエの経営する孤児院で暮らす子供たちがうるさく囁き立てる。口笛を吹いたり両手で顔を覆いつつ隙間から覗き見ていたり。いつも來てもこの孤児院はにぎやかだ。しかしあいさつもなく出会い頭に抱きついただけで卒倒されるのは予想外だつた。

アンジエとは魔王討伐の任を負い数年間共に旅をした仲だ。もちろんちよこつとレズの気があるのには気づいていたけど、ここまでウブだったとは。そういえば私が魔法使いのローブをたくしあげて川遊びしていた時、やたら足の方に視線を感じたな。今思えばあれもヒントだったか。まだ十三の私に欲情する、レズの足フエチシスター。友人の闇を垣間見た気がした。

「なあ、続きをー？」

「きやつきやうふふは？」

「誰がするか。用は済んだからもう帰る」

「何しに来たんだよ変態魔法使い！」

魔法使いじゃない、大賢者だ。

そう言い捨てて、私は次の実験対象を探しに向かつた。

魔法使いは知識を求める。その範囲は魔法に限らず政治、経済、哲学、数学など幅広い。魔王討伐の任を果たし、一気に時間が出来た私が探求を始めたのは『愛』についてだった。

理由は単純、私が愛されたいからだ。誰かに愛されている実感が欲しかつた。しかし何をされれば愛を実感できるのか見当もつかず、まずは愛とは何かという定義から考えることにした。

愛にはいろいろな種類がある。友愛、敬愛、親愛、恋愛。勇者パーティに売り込みをかけてそれなりに濃い数年を送つてきた私にはほとんどの愛を経験した覚えがあるけれど、愛されている実感はなかつた。なぜならどの愛も打算に裏打ちされている、と感じたからだ。

友愛は友達としての利用価値、敬愛は敬意に値する社会的評価、親愛は親しみを覚えやすい容姿、恋愛はつがいを欲する生物の本能。すべて損得勘定の一種だつた。

だとすれば、私が欲している愛の定義も決められる。無償の愛だ。

たとえ私が何の価値もないゴミになろうと、私がそこにいるという理由だけで喜んでもくれる。私のためなら命だつて投げ捨ててくれる。そんな熱い情動を実感したいんだ。

「<sup>ア</sup><sup>ン</sup><sup>ジ</sup><sup>エ</sup>シスターは性愛、と」

アンジエはダメだつた、と研究ノートにメモしておく。倒れる前の荒い息からは性愛しか感じられなかつた。

というかさつきのはかなり危ない橋だつたかもしない。アンジエは鉛製の巨大口

ザリオで数多のモンスターをミンチにしてきたパワーシスターだ。もしその気になつて迫られたら逃げ切れなかつた。

「あれ、ユース？ 何してるの？」

「おお、いいところに」

考えながら街の大通りを歩いていると、雑踏の中に見知った顔を見つける。

活発なショートカットにぱつちりした目つき。細く締まつた手足は健康的な小麦色に焼けている。そして背中には国宝『勇者の剣』。

当代の勇者様であるエヴァ・ヒロイネスだ。

外見こそ私より少し上の少女だけど、魔王を倒した大英雄様だけあつて往来の視線が多数向けられている。こんなところで何してるので、と聞きたいのは私の方だつた。とはいえそれよりも大事なことがある。愛を確認しないと。

「ちょ、ちょつと、ユース！」

同じように抱きついてエヴァの魔力を乱してやる。その波形を見るに——うーん、エヴァも違う。これは友愛だ。

一緒にいると落ち着く、困つたときに優しくしてくれる、時々奇行に走るのが危なつかしいけどだからこそ放つておけない。こんなところか。好感は嬉しいが、結局は私がエヴァにもたらす利益が根本にある。

私が価値のないゴミになつても愛してくれる情動は、感じられなかつた。

「わ、私はいつでもおつけーだけど、やっぱりほら、雰囲気つて大事じやない？ こんなに人のいるところでつていうのは、人としていけないことだと、ね？ ううん、もちろんユースがそういうの好きだつて言うならいくらでも付き合う覚悟だけど、初めてはormanチックに——」

「えつ、こわい」

エヴァの魔力がアメーバのように蠕動しだした。

爆発的な性愛を感じ、反射的に身を引く。

エヴァは光のない目でトリップしていた。

「実は私、ユースとそういうことになるの考えたことがあつてね、今一生懸命魔法を勉強してるところなの。なんの魔法、つてそんなの女の子同士で作れるようにする魔法に決まつて——」

お熱いねえ、ヒヤジが飛んでくる。私は悪寒でむしろ寒いよ。

くねくね腰を振りながら性愛を振りまく女勇者を捨て置き、そつとその場を後にした。

次のターゲットを発見。

二メートル近い筋骨隆々の体に、分厚い金属鎧。山のような威圧感を放ちながら貴族街を練り歩く彼こそ、王国騎士団長、ガタイ・イーネその人である。部下の一般騎士は弱いけどこの人だけはエヴァ並みに強く、魔王討伐にも手を貸してもらつた。

正直エヴァまでレズだつたのはショックで、同性の知り合いを尋ねるには時間をあけたい気分だつた。さつそく正面から近づいていくと、ガタイさんのいかつい視線とかち合う。

「おや、ユース女史」

「なぜ頭を抑える」

ユースさんの腰元に突進していくものの、太い腕で頭を抑えられた。リーチ差のせいで一步も前に進めない。

「貴女がまたおかしな実験をしていると民から通報を受けましてな。いたずらに人の心を乱すものではない」

「ガタイさんは私のハグで心が乱れると?」

「答えにくい質問ですが、はつはつは!」

笑い飛ばしてはぐらかすと、ガタイさんは一転弱りきつた声を漏らす。

「して、何を企んでおられる？ 以前のような破天荒は遠慮願いたいが」「人をじやじや馬のように言うな」

破天荒つて。もしかして流れ星に願い事をかけるために町中でメテオ魔法使ったとか、それともやたら外皮の硬い邪魔を倒すため、ガタイさんの両手剣を尻の穴にぶち込んだことを根に持っているのか。相変わらず見た目よりネチっこい人だ。

まあこの距離なら抱きついて魔力を波立てずとも、目を凝らせば見える。ガタイさんが私に向けるものは——敬愛。

魔法を極めた身として、大規模な範囲魔法で魔王軍を拠点ごと灰にしたり、天変地異を起こしたり、ガタイさんの前で色々とやつてきた。そのことを買つてくれてるようだ。要は強い魔法をたくさん使ってすごいですね、と強く思つてている。

やはり私の欲しいものではない。

「どうされました？」

突進をやめてため息をつくと、ガタイさんが戸惑つている。

「……なんでも。私はまだ行くところがある。失礼」

追及を受ける前にその場を立ち去る。

困惑しきりのガタイさんからじつと見られているのを気にせず、私は愛探しの旅を再開した。

夕暮れ時の路地裏。汚い壁に寄りかかって空を見上げると、オレンジの空にカラスが飛んでいた。

ガタイさんと別れてからも知り合いや友人巡りを続けたけれど、私の求める愛はなかつた。私の大賢者としての価値や見た目、性格に利益を感じている人しかおらず、存在そのものを肯定する愛は皆無。

しかし私は諦めない。欲しいものがないなら作ってしまえばいいんだ。

私は愛を実感したくて、その愛は損得勘定によらないナンセンスな愛である必要がある。たとえば私の命のかかつた状況で、自分の命を捧げてまで私を助けたとすればそれこそナンセンスの愛だ。死ねば損得も何もない。打算から解放された愛は自己犠牲によつて成立する。

そうなるとまずは敵が必要だ。私を殺せて、なおかつエヴァとアンジェ、ガタイさんなんかの人間卒業組を相手にできるだけの敵が。そんな敵は魔王討伐の旅でみんな倒してしまつたし、生き残りが居たとしても付き合つてはくれないだろう。でも大丈夫。これも創つちやえればいい。

私は手近な石を拾い、地面に召喚魔法の魔法陣を書いていく。

### 『アイテムボックス』

詠唱で異次元の収納スペースを呼び出し、その中から触媒となるブツを選んで、魔法陣の真ん中へ設置する。異様に凶々しい魔力のにじみ出る、四本指の右腕。魔王の死体の一部である。

「悪魔召喚！」

面倒だつたので呪文は省略し、手早く魔法陣に魔力を流して敵モンスターを召喚する。

するとぼん、と気の抜けた音。

果たして魔王の死体という最高の触媒に釣られて召喚されたモンスターは、

「ワレヲ呼ンダノハキサマカ、賢シキ者ヨ……」

「あつ、アナルドラゴン！ 久しいな」

「食イ殺スゾ」

かつて尻の穴から剣を挿入し討伐した邪竜、通称アナルドラゴンだつた。

すっかり日の落ちた深夜。

私とアナドラは再会した直後、隠蔽魔法を使いつつ王都から離れた草原まで移動した。

アナドラは四本足と猛々しい黒い翼を折りたたみ、猫の香箱座りのようにして私と顔を突き合わせている。

「いいかアナドラ、演技の時間だ」

「オイナンダソノ呼ビ方ハ」

「対価を支払つて召喚した以上、支配権は私にある。いい演技を期待している」

「コノクソ女ガ」

アナドラは顔をそらしてぶふう、と暴風のようなため息をつく。それだけで草原の一部がえぐれてしまつた。

「スデニ尋常ナ勝負デヤブレタ身ダ、見苦シク暴レハセン。シテ、演技トハ?」

案外潔いヤツだ。前に会つた時は問答無用で私の方から殺しにかかつたけど、話してみれば分かり合えたかもしれないな。

ともあれ、過去は過去。今は三文芝居の打ち合わせが大事だ。

「いいか、君はアナルソード・ショックで死んだかに思われたが、冥府で魔王の力を借り、どうにか蘇つた。今はアナルの仇をとるため、アナル大作戦の実行犯である私を襲いに

きた」

「乙女ガハシタナイ言葉ヲ連呼スルンジャナイ」

「うるさいな」

「んもう、話の腰を折るんじゃないよ。

「君の魔力で復活を察知した私が一人でここに来て、鉢合わせしている。ここまではいいな?」

「ヨイゾ。何ガシタイノカ全ク分カラソガ」

「私たちは戦いを始めるが、復活した君の力が強すぎてボロ負け。死にかける」

「ソソ?」

「そこへ私の仲間が駆けつけて君と対面。『我ガアナルノ仇! コヤツダケハ死ヨリモ辛イ苦痛ヲ味ワワセネバ氣ガスマヌ! コヤツヲ差シ出スノナラバ見逃シテヤロウ。シカシ齒向カエバ、復活シタ魔王軍ガ王都ヲ襲ウデアロウ』。そんな風に脅しをかけてくれ。後は流れでいこう」

「チヨ、チヨツト待テ。何ガシタイノカ訳分カラソゾ」

「とりあえず言うとおりにやればいいんだ! ほら始めるぞ!」  
アナドラーの鼻先をペシペシ叩き、善は急げとばかり芝居を始めるのだった。

汝恋せよ乙女なら

命短しさあ急げ

何度も暗唱した聖書の言葉通り、私アンジェは恋に落ちました。一目惚れでした。

最初の出会いは王都のはずれ。孤児院の祭壇に吊るされた伝説の武器、破魔の大ロザリオに選ばれた私は、同じように勇者の剣に選ばれたエヴァさんと一緒に、魔王討伐の旅に出ようとしていました。

『魔法使いを一人どうかな?』

勝ち気な言葉に振り向いた瞬間、初恋の衝撃で私は絶句しました。

ユース・ユーティリタス、十歳。華奢な体をいかにも魔法使いらしい黒のローブで覆い、その体には不釣り合いなほど大きい杖。少し釣り目気味になつた目元にはエメラルドグリーンの瞳が輝いていて、堂々とした自信がにじみでていました。

ユースさんは独学で修めた魔法を実際に使いたくて勇者パーティに売り込みにきたらしく、軽い理由にエヴァさんは眉をひそめていました。私はこの子と一緒に旅できるならどうでもよかつたけど。

さいわい、実際に魔法を見せられると即採用となりました。杖をひと振りただけで

雨が降つたり雷が落ちたり、流れ星まで落ちてきたり。魔法つてすごいです。

私たちが期待したとおり、ユースさんの魔法でたくさんの魔王軍を倒すことができました。浮遊魔法で鳥のように剣を飛ばし、邪竜のお尻の穴に突き刺した時は思わず歓声を上げて抱きついてしました。ユースさんは強くてかわいいのです。

ローブをたくしあげて水浴びしていた時なんて、興奮のあまり心臓が爆発しそうでした。

普段隠れている部位が露わになるとどうしてああも眩しいのでしょうか。分厚いローブとブーツに覆われているほつそりとしたおみ足が、清水に濡れて輝く。その光景を見て以来、お召し物の下にある肌をあますところなく舐め回したいと、そう確信したのです。

この思いは留まるところを知らず、ユースさんが宿屋の相部屋でブーツを脱いだ時などは、指の間からくるぶしのふくらみに至るまで丹念におしゃぶり申し上げたい衝動に駆られました。一日中歩いた彼女のおみ足の味、舐められる彼女の表情。想像するだけで私の下腹部は受胎したがごとき熱を帯び、なおさら彼女への思いが強まる日々でした。

ああ神よ。恋する相手をペロペロしたいこの衝動、これを愛というのですね。

『うえつ、ちょ、こつち来ないで。邪教じゃないのそれ？』

この思いを相談したエヴァアさんはそれ以来距離が遠くなつてしましました。邪教なんて失礼です。

さて、かわいい、強い、舐め回したい。三拍子そろつたユースさんですが、まだあります。

なんと就寝中必ずといつていいほど泣くのです。しかも泣きながら近くのものに抱きつきます。

理由は分かりません。後から旅に合流したガタイさんはユースさんの出生がうんぬんと言つていた気はしますが、どうでもいいです。抱き合える可能性がある、それだけ分かればいいんです。

隣で寝れば確実に抱き合うことができるわけですが、エヴァアさんが勇者の剣を振り回して妨害してくるので結局旅が終わるまで抱けませんでした。  
けれどそれで良かつたのかかもしれません。

今朝のことです。私は急に訪ねてきたユースさんに抱きしめられ、卒倒してしまいました。意識のある状態で向こうから抱きついてきたシチュエーション、実物ならではのぬくもりと柔らかさ。私の意識を飛ばすのに十分な威力でした。  
「ユースさんつ、ユースさんつ、ああっ！ 神よっ！」

「姉ちゃんうるさいー！」

乙女なら 喘ぎ高ぶれ 一人でも

あのときの感触を思い出しながら、私は神の教えに従い一人で何度も自分を慰めているのですが、結局ユースさんは何をしたかったんでしょう？

「神よおおおつ！……あら？」

妄想のユースさんと共に天界へ至つていると、何やら捨て置けない気配を感じます。王都の外でせめぎ合う強大な二つの魔力。一つはユースさんですが、もう一つは――

「邪竜！」

「だから姉ちゃんうるさいって……どうしたんだ？」

弟が怒り心頭で自室に入つてきましたけれど、かまつてゐ暇はありません。

「あらあら、また口ザリオを振る機会があるなんてね」

「口ザリオ？ ま、まさかあれをそつち系のおもちゃにする気か!?」

「頭おかしいんですけどあなた」

「姉ちゃんに言われたくねえよ！」

悪ガキの弟分をあしらいながら、祭壇の上にかけられた巨大口ザリオを装備します。

きつとエヴァさんも今頃同じように準備しているでしよう。

今すぐ行きます。待つていてください、ユースさん。

外れにある草原の方向では膨大な魔力が渦巻き、それは魔法に疎い一般人でも感じられるほどだった。ざわめく夜の王都を私、勇者ことエヴァは駆けている。

「それならそうと言つてよね……！」

口からつい漏れるはある魔法使いへの恨み言。どうやら一人で抱え込む癖のあるあの大賢者は、今回も抱え込んでいたらしい。

王都の外で荒れ狂う魔力のうち一つはユースで、もう一つは確実にあのときの邪龍だ。どうかして復活し、ユースが先んじて勘付いた。それを相談するかどうか迷った末に、出会い頭に抱きつくという奇行に走ったのだろう。

たしかにユース一人でもあの邪龍を再び倒すことはできる。だけど相談もしてくれないのは水臭いじやんか。

だからこうして走っているのは、文句を言いに行くためだ。討伐を手伝うつもりはあるけどあくまでもついで。要らない遠慮をしたのを説教してやる。

面倒くさいのは、今同じ場所に向かっているだろうアンジエだ。アンジエは悪いヤツじやないけど、ユースが絡むと性職者の一面を見せる。正直気持ち悪いから来ないでほしいんだけどな。

そういうつた考えが楽観のしすぎだと分かつたのは、すぐだつた。

「ウソ……？」

王都の外の草原は見る影もなく荒れ果て。

その中心でユースが倒れ伏し、邪竜が雄叫びをあげていた。

「我ガアナルノ仇！ コヤツダケハ死ヨリモ辛イ苦痛ヲ味ワワセネバ氣ガスマヌ！ コ  
ヤツヲ差シ出スノナラバ見逃シテヤロウ。シカシ歯向カエバ、復活シタ魔王軍ガ王都ヲ  
襲ウデアロウ」

よしよし、ちゃんとエヴァ、アンジェ、それとガタイさんも来てくれる。アナドラ  
の演技も注文どおり。

後は無関係の他人と自分の命を賭けてまで私を助けてくれるのか、死んだふりして見  
てるだけ。

「……」

見てるだけなんだけど。なんだか妙に静かだ。アナドラの息遣い以外何も聞こえな  
い。

「ひえっ!?」

こつそり薄目で見てみると、思わず声が出てしまう。さいわいアナドラの悲鳴と重なつてかき消されたけれど、やばい。

エヴァとアンジエの目が人殺しのそれになつてゐる。  
ガタイさんも私が倒れているの見て驚いてたけど、二人からにじみ出る絶対殺すオーラ見て固まつちやつてるよ。

「きれいな……おみ足……ペロペロ……」

「二人で……子作り……」

「待テッ！　復活シタノハ我ダケデハナイ！　妙ナ動キヲスレバ新生魔王軍ガ王都ヲ襲ウ——」

知つたこつちやねえ。声には出さずとも、二人がそう吐き捨てたように感じた。

地響きとともに岩が碎ける轟音。鉛の巨大口ザリオを振りかぶつたアンジエが、アナドラの脳天をぶつ叩いたのだ。

すさまじく外皮の硬いアナドラもこれには面食らつたらしく「ブヘツ」と悲鳴を上げてゐる。

「ユースさんの神聖なお体に傷をつけて……どう落とし前つてくれるんですか？」  
「違ウ！　モウ言ツテシマウガコレハスペテ——」

「頭が高いっ！ 口ザリオにキスして懺悔なさいっ！」

何度も何度も重量級の口ザリオを頭に振り下ろすアンジエ。いくら外皮が固くともあれだけ叩かれると辛いだろう。翼がピクピクと動いているが、めまいが起きているのか飛んで逃げることも出来ない。

聖女の執拗な強制懺悔口ザリオでアナドラの動きが止まっている。この間、今代の勇者であるエヴァは何をしているのか。

「勇者の剣の力——その尻で受けるがいい！」

勇者の剣を構えていた。刀身は聖なる破魔の力で焼きゴテのように赤熱しており、弓を引き絞るように剣を構えている。アナドラの尻付近で。

めまいで動けないアナドラは再びの惨劇に気づく気配はない。  
ガタイさんが合掌し、念佛を唱えているのが見える。  
私もこつそりそれに倣つた。

「ユースさん！」

「ユース、しつかりして！」

アナドラの昇天した後、私はぐつたりと意識のないフリをして二人に助け起こされていた。

ここで演技だとバレれば悲惨な二度目の最期を迎えたアナドラに申し訳が立たない。うーん、といかにも今目覚めたように振る舞つてみる。

「……エヴァ、アンジェも。どうしてここに？」

「どうしてじやないよバカつ！ なんで一人で抱え込むの！」

「私たちに気を使つてくれたのは分かります。ですがユースさんが傷ついては元も子もないのですよ？」

「ごめん……」

エヴァは涙目で声を荒げて、アンジェは無表情で静かに諭すように、一人で戦つていたことを責めてくる。魔力で心を読まなくとも、私を心配してくれる気持ちがひしひしと伝わってきた。

それだけでなく、彼女たちは王都の人々と自分たちの命を危険に晒してでもアナドラと戦つてくれた。損得勘定で言えば迷いなく切り捨てるべき私みたいな子供のために。

だから今のエヴァとアンジェの心には、打算に基づかない純粋な愛があるに違いない。そう考えて心を覗くと――

「ひつ！」

「ユース？」

「どうしたのですか？」

そこにあつたのは恐ろしいレベルの狂愛と性愛だつた。エヴァは邪法を使つてまで私との子をなすことに執着していて、アンジェは私の足を中心に舐め回そうとたくさんでいる。私の求めた、純粹な愛はどこにもない。

「また怖い夢でも見たの？ 大丈夫よ。私は絶対ユースの味方だから」

「私たち、の間違いでしよう。ユースさん、私たちは決してあなたを離しません。神の名のもとに誓いましょう」

「邪教の神に誓われてもね……」

「黙つていなさい貧乳」

「は？」

「……ふふつ、あははつ」

思わず自嘲の笑いが漏れる。

私の求めた純粹な愛は、存在しないと気づいてしまつた。だつて一番私を大切にしてくれるエヴァとアンジェでさえ欲まみれの性愛を持つてるんだ。二人でこれなら、無色透明の愛をくれる人なんているわけない。

けれどそれでいいんだ。

「アンジェ、頼みがある」

「頼み？」

「今日は一日中歩き回つて疲れた。久しぶりに戦いもしたし、もう足がクタクタだ」「……っ！」

「ブーツを脱がせてくれないか？」

「神の導きのままに」

神聖な供物みたいに私のブーツの紐を解き始めるアンジェ。

エヴァはアンジェに親の仇を見るような目を向けると、一転心配げな表情をこちらに向ける。

「ね、ねえユース、いいの？ そんなこと言つたらこの破戒シスター行くどこまで行つ  
ちゃうよ？」

「いいんだよ。それよりエヴァ、どつちが母親になる？」

「ふつつか者だが、よろしく」

「えーっ!?」

顔を真っ赤にしたエヴァは、叫びと共に放心してしまった。アンジェは私のブーツを脱がせるのに夢中になつてゐる。

「……私は一体何を見せられているのでしょうか？」

野太い声が聞こえた。ほとんど存在を忘れていたけれどガタイさんもこの場にいたんだ。視線だけそちらに向けると珍獣でも見るような目を私たちに向けていた。

仮に無色透明の愛があつたとしよう。ここで愛とは当人の外見、性格、功績などを一切無視して、存在だけを肯定してくれる情念のことだ。

しかしそれは本当に愛と呼べるだろうか。その人が持つて生まれたものや積み上げてきたもの、誇れるものを見もせずに、ただ肯定する。平等で公平だけど、その思いを向ける相手は誰だつていい。罪人でも英雄でも愛される。そんなの無関心と変わらない。

繁殖欲求に狂つたエヴァの狂愛と、肉欲まみれのアンジェの性愛。本当に私が必要としていたのは、私だけに向けられるこういつた愛だつたんだろう。

それが分かつたから私は二人を受け入れた。たくさん迷惑をかけた分、二人の愛に精一杯答えようと思つたんだ。

「あらあらエヴァさん、いたんですね。道理で街がドラゴンのお尻臭いと思いました」

「出たわね邪教シスター。それとあの剣はとっくに国へ返した。これは普通の剣よ。色ボケで目までおかしくなったのかな?」

「えーと、二人とも。そうカツカせずに……」

「お黙り」

「はい……」

あの日から数日たつたある日。

王様への報告やハツタリだつた新生魔王軍の調査協力やらを終わらせると、二人は当然のように私の屋敷までついてきた。そして私たちは一夜を共にしたわけだけど、二人は私を挟んで毎晩牽制合戦をしてて、期待してたようなことは未だない。

私の方はもういつでも準備万端だから、三人一緒に初めちゃおう。何度もそう言い出そうとするけど聞いてくれる様子じやない。

今も往来のど真ん中で私を挟み、視線で火花を散らしている。

「おつ、今日もやつてるな」

「変態勇者と邪教シスター、小さな大賢者」

「こんなのに国が救われるなんざ世も末だぜ、ハツハツハ！」

野次馬の堂々とした陰口に言い返す余地はなかつた。

魔王討伐と復活した邪竜の討伐で私たちの評価はうなぎのぼりになつてゐる。当然、

人となりも広く知られた。エヴァが外法に手を出してることもアンジェが邪教シスターであることもだ。

「むきーつ！ 今度はあなたのお尻に刺してやるつ！」

「上等です。我が神への供物にしてあげましょう」

「いいぞやれやれー！」

いつもどおり先にキレたエヴァが剣を抜き、アンジェはロザリオを肩に担ぐ。野次馬が囁き立て、私はそそくさと乱闘の中心から抜け出す。ここから二人がくたびれるかガタイさん率いる騎士団が仲裁に入ってくるかするまでがいつものパターンだ。野次馬の中にはどのパターンで決着がつくか賭けが始まっている。  
でも私は結末に興味がない。

「ユースは私のもの！」

「いいえ、ユースさんのおみ足は私のものです！」

そうやって二人が争えば争うほど、愛を実感できるから。  
私は愛されたかった。

そして今、愛されている。